高知県立坂本龍馬記念館だより 2018（平成30）年10月　第107号

高知県立坂本龍馬記念館 The Sakamoto Ryoma Memorial Museum

龍馬

ひとう

海援隊旗（二曳きの旗）

http://www.ryoma-kinenkan.jp

不易 FUEKI RYUKO 流行

入館者400万人を達成しました！

去る7月15日、坂本龍馬記念館の歴史に新たな一コマが加わりました。この日、平成3年のオープン以来400万人目のお客様をお迎えしました。記念すべき400万人目の入館者となったのは、東京からお越しの千崎敏司さんです。館内にて記念イベントがおこなわれ、証明書と記念品が贈呈されました。

左から全国龍馬社中会長の橋本邦健さん、千崎敏司さん、髙松館長

千崎さんは、高知県土佐市の出身で、今回帰省の際の来館だったそうです。来館の目的を聞いて、我々は驚きました。当館本館展示の核となるデザインを手がけたイラストレーター奈路道程さんの同級生で、その絵を観に来たというのです。展示を通じた、とても不思議な縁を感じます。

本館「幕末広場」にて
奈路道程さんのイラストを鑑賞

千崎さんは、現在「ご当地マルチアーティスト」として、関東のインターネットテレビ、FMラジオ番組を中心に様々な活動をされています。「地元愛がとても強く、いつも高知のアピールをしている。今回たまたま400万人目となったことも、自身が持つラジオ番組等でおもしろおかしく伝えていきたい」と力強く語っていただきました。

400万人到達という記念すべき日を迎え、館がたどってきた歴史の重みを感じつつ、今後ますますの充実を誓うところです。早くも視界の先にあるのは次の区切りの500万人です。新たな目標に向かって歩みを進める記念館を今後ともよろしくお願いいたします。

～特別寄稿～
400万人入館のお客様

こじゃんと大きいご縁をもろうたぜよ。

千崎 敏司

自身で言うと変な誤解を与えそうですが、私は不思議なご縁や偶然な事が多々あります。

今思うと、今回の龍馬記念館来館400万人目の素敵なご縁や不思議な出逢いは昨年12月17日から始まったような気がします。

高知愛、土佐市愛、宇佐町愛が物凄く強く、自身の番組で毎回高知をネタにしたトーク、高知出身の業界人をゲストでお迎えしたり、そしてイベントMC、ライブMC、他仕事の打合せなどでも、高知をアピールさせていただいています。

そんな私は年3回用事を兼ねて、母の元気な姿を見に、実家のある土佐市宇佐町へ帰郷し、今夏の目的は、実家の土地の草刈り、同級生・奈路道程君が描いた龍馬記念館の幕末志士たちの似顔絵見学、洪水による県下の状況、自身の番組・突撃生電話のコーナーで取り上げたカフェ・喫茶店巡りなど。

友人で同じ事務所の山口県在住（幕末風に言うと、長州藩）、シンガーソングライター・藤生憲治さんがたまたま休みが同時期だったこともあって来高の誘い。

藤生さんは15日の朝8時ごろ高知入りだったので、土佐市内の某食事処でモーニングランチをするために待合わせ。

同席には、高知を中心に活動している歌手・CHIHOさんの後援会長・藤崎一彦さん（土佐市新居）と三人で雑談しながらの食事中、藤崎さんへ何気に仕事の質問をしたところ、「いま幕末に活躍した、ジョン万次郎と一緒に漁に出て遭難した漁師さん（宇佐町出身）のお墓を整備しゆうで…」と聞く。

実はその前日には不思議なご縁がありました。

話はそれますが、14日の午前、草刈りを終えた私はあまりにも暑かったので、同級生が局長をしている宇佐郵便局へ涼みに入りました。

上京して以来数十年ぶりの宇佐郵便局。

この日は局長不在で、初めてお会いする男女の職員と初対面らしからぬ和気あいあいと雑談をしている時、高知市内から通われている女性職員へ何気に高知出身のJAC俳優・西田真吾さんの名前を出したところ、何とその女性職員のお母さんと西田さんのお母さんが友人同士だったのです。

つまり西田真吾さんは、高知を舞台にした映画・サムライせんせい（武市半平太先生をモチーフに描いた）のアクション部門を仕切った方。

西田真吾さんと私は今年2月に俳優・千葉真一さんのイベントで初めてお会いさせていただき、何気に高知出身ですと私が言った途端、「おれも高知で」と西田さん。

その後、西田さんとは都内で何度かお会いし、土佐弁で会話しながら親交を深めています。

15日の朝食を済ませ、その足で藤生さんと宇佐から新居経由で龍馬記念館へ向け車で移動中、仁淀川河口大橋の側で、今年3月の高知（桂浜、土佐市新居地区観光交流施設「南風・まぜ」）でのミュージックビデオ撮影時の話題をしながら、リニュアル前の龍馬記念館の会話になる。

館へ着くと、同級生が描いた絵を早く見たくて、わくわく気分を抱いて入口へ。

私もイラストレーターの肩書きがあり、彼のタッチ、作風に高い評価をしているので、龍馬記念館の仕事の話を聞いた時は自分のように嬉しかったことを覚えています。

余談ですが、今春3月の自身の放送時（高知県土佐市出身の俳優・西村雄生さんゲスト出演）でも、カフェ南風を取り上げさせていただいたことがあって、こちらも不思議なご縁がありました。

入館し、沢山のカメラクルーさんたちがいたので、周りをキョロキョロしながら、誰か有名人が来るのではと思いつつ入場料をお支払いした途端、館長・髙松さんより、400万人目おめでとうございます、と言ってきたので驚きました。

その数分後に、来館400万人目として盛大なお祝いをいただきました。

今も忘れられない出来事であり、素敵なお時間と、大きなご縁をいただきました。

平成3年の開館からの入場者が400万人という驚異的な数字でも驚くのですが、館内の設備、展示内容、お土産の品には目を見張るものがあるし、何といっても各ブースには様々なストーリーがあり、来館者の方々への心のこもったおもてなしを感じます。

歴史好き以外の方々にも、とてもわかりやすくなっていて、とくに小学生にも理解できる内容だと思います。

話を昨年12月へ戻すと、その日の生放送のゲストは藤生憲治さんで、突撃生電話は山口県下関市長府川端にあります「カフェ・桂のさと」。

初めてお電話で会話をする女性オーナーさんから、桂小五郎さんのご親戚と教えていただき、生電話中びっくり。

ここでも不思議なご縁をいただきました。

その後、6月に仕事を兼ねて山口県へ行った時に、桂のさとの女性オーナーさんとお会いしてきました。

大歓迎を受け、素敵なお時間をいただきました。

そしてその数日後、400万人目の取材中にお名刺交換をさせていただきました、全国龍馬社中会長・橋本さんから今、渋谷に居るから顔出せるかとお誘いをいただき、こちらでも不思議なご縁を授かりました。

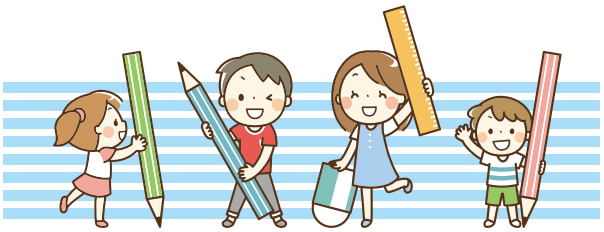
橋本会長とは今も深い交流をさせていただいています。

龍馬先生、幕末土佐藩の志士のみなさん、他の藩の志士のみんなさん、そして高知県民のみんなさん、県外にいらっしゃる高知県出身のみなさん、龍馬記念館のご関係者のみんなさん、これも土佐湾の波の波動が引き寄せてくれた不思議なご縁と思い、心から感謝を申し上げます。

最後になりますが、私の母方の旧姓が坂本で、これも何かのご縁だと思っております。

こじゃんと大きいご縁をありがとうございました。

夏休み子どもフォーラム報告



龍馬記念館の夏休みの恒例行事となりました「夏休みこどもフォーラム」。今年は、北川村の中岡慎太郎館へのバスツアーを8月19日（日）に行いました。

中岡慎太郎は、現在の安芸郡北川村に生まれ、龍馬と同じように脱藩し、新しい日本をつくるために奔走し、龍馬と並ぶ人気のある人物です。龍馬が京都近江屋で暗殺されたとき、一緒に凶刃に倒れたこと、龍馬が海援隊長だったことに対し、慎太郎は陸援隊長だったこと、などから、龍馬と慎太郎は一緒に紹介されることも時々あります。（京都の円山公園には2人が一緒の銅像があります。）

中岡慎太郎の生家

実際には、二人は生まれた環境（龍馬は町中で生まれたシティーボーイ、慎太郎は山育ちのカントリーボーイ！）も家の職業も考え方も異なります。そんな生まれも育ちも異なる二人を比べてみることで、二人の新しい国づくりかける思いを考えてみることが、今回のフォーラムのテーマでした。

9時、歴史好き、龍馬好きの小学校5，6年生を中心にほぼ満席のバスは高知駅を出発しました。車内では、クイズで龍馬についてちょっとお勉強。正解のあとは、三浦学芸員による詳しい説明。全問正解が3名いました！

途中、芸西村文化資料館で開催中の「おりょうの生涯展」を見学。芸西村は、龍馬の妻・お龍が夫の死後しばらく暮らした地です。珍しい写真も展示されており、参加者のみなさんは熱心に見学をされていました。芸西村を出発した後は、再び北川村に向います。バスの中では、三浦学芸員がお龍さんについて解説をしました。面白いエピソードも多く、多くの参加者は、「へぇー」「ほおー」と感心して聞いておられました。

中岡慎太郎館

やがて、バスは岩崎弥太郎を故郷・安芸市、野根山二十三士の田野町などを通り（三浦学芸員による「高知県東部の幕末の志士たち」の解説つき）、慎太郎の故郷・北川村に到着。

中岡慎太郎館からみえる、山の稜線や川の流れは慎太郎が生まれた頃からかわっていないということです。慎太郎がみたものと同じ風景といえるでしょう。

まずは中岡慎太郎館を豊田学芸員のご案内で見学。その後、北川村の実生ゆずをたっぷりきかせたチラシ寿司のお弁当を昼食にいただきました。昼食後は、三浦学芸員と豊田学芸員から、龍馬と慎太郎それぞれの生まれた場所、小さい頃や青年時代のお話、家の職業、幕府に対する考え方…をお話してもらい、二人を比べてみました。メモをとりながら熱心に聞く参加者も多くみられました。

さて、昨年から「龍馬フォーラム」では、参加者自身が調べたり、考えたりしたことを、工作などの〝かたち〟にするようにしています。今年は、折り紙や半紙で手作りした「ミニミニ巻物」に「筆ペン」で、思い思いにかきつけていきました。現代では、手紙自体を書く機会が少なくなり、ましてや、筆で手紙を縦に書く機会は皆無でしょう。幕末の龍馬や慎太郎が手紙を書くときに使った筆は、鉛筆やパソコンのように間違えても消すことができません。今回は筆ペンを使いますが、やはり消すことができません。さて、どうする？「龍馬の手紙をみていると、間違えたところは、ぐしゃぐしゃにして、次から書き始めていることがわかります。」という説明をして、筆ペンで書くときのコツ（？）を伝授。なれない書き方に、戸惑う参加者もいましたが、素敵な「ミニミニ巻物」ができあがりました。実際に筆ペンで書いてみて、展示している龍馬の手紙をみるときに、少しでも関心をもってみてもらえるきっかけになればうれしいですね。

芸西村文化資料館

河村　章代

学芸員の視点

“資料を運ぶ”仕事

亀尾美香

博物館が展示を開催するにあたり、他館の資料を借用する機会は多い。特に、相手先が遠方の場合、大型資料の場合、とりわけ貴重な資料の場合などは、専門業者に輸送や梱包、展示作業などを依頼することになる。今回は、当館がよくお世話になる、日本通運㈱の美術品輸送の仕事を紹介したい。

日本通運㈱（以下「日通」）は、言わずと知れた国内有数の運送会社だが、美術品輸送の分野では最大手かつ〝老舗〟でもある。資料（美術品）の借用・輸送では、担当学芸員が先方学芸員と資料のチェックを行い（キズや劣化の度合、付属物など、借用時の状態を記録し、返却時に確認する）、業者が資料に合った方法で丁寧に梱包する。学芸員は資料に付き添うため、トラックに同乗する。「安全かつ確実に」輸送することが至上命令であるため、どんなに遠方でも基本的に陸路を輸送する。もちろん、資料には借用から返却までの間、保険がかけられる。

借用資料を梱包する。確実に資料を運び、運転も交代するため、２名体制で従事。

日通高知支店で、美術品輸送の業務に従事する社員は6～7名。いずれも社内研修を受講し、資料の扱いや梱包について専門的な技術を習得している。近年では、（公財）日本博物館協会が「美術品梱包輸送技能取得士」（1～3級）の資格認定試験を実施しており、各社の技術を客観的に計る目安としている。日通全体では、1級9名、2級28名、3級36名の資格取得者がいるとのことである（平成30年8月現在）。

資料を専門に運ぶ車は「美術専用車」（通称「美専車」）と言い、高知支店の美専車は4トントラック（積載量は約2トン）。エアサスペンション、温度調節機能、盗難防止ブザーなどが搭載されており、庫内に資料を固定できるようになっている。

県内では、当館のような歴史系博物館のほか、美術館、文学館など多くの館が同社に資料（美術品）の輸送を依頼しており、高知支店では年間80件ほどの仕事を請け負っているとのことである。当館の場合は古文書類が多いが、依頼先によっては大きな絵画や仏像、国宝や重要文化財などを運ぶ場合もあり、梱包・輸送とも大変に気を遣う作業となる。

先日、企画展「大義と忠誠の戊辰戦争」展の前期・後期の資料入れ替えのため、東京と福島へ美専車で出張した。福島までトラックで往復6日間、うち4日間は移動のみに費やされる長旅である。学芸員にとって、自分以外に資料に付き添い、しっかりとした梱包を施し、輸送してくれる日通は心強い存在である。同行してくれた社員の方はこの道20年のベテランで、「資料に触るのは緊張するけれど、他の人がなかなか見られないものが見られるのは貴重な経験」と話してくれた。博物館の運営は、こうした表には見えないところで見えない仕事をする人がいてこそ、成り立つものである。

成稿にあたり、日通㈱高知支店の八ツ波啓氏、光國文章氏、橋本隆一氏、多賀誠司氏にご協力いただきましたことを記してお礼申し上げます。

日通高知支店の「美専車」

「浦戸　歴史の風景」(10)

洋々と開ける大海原に

土佐史談会会長
現代龍馬学会理事
宅間　一之

木造三本檣の木造船は、静かに高知新港7-2岸壁に着岸した。それは「志国高知幕末維新博」第二幕開幕の日であり、高知県立坂本龍馬記念館新装オープンの日でもあった。その関連イベント「咸臨丸で行く龍馬クルーズ」に呼ばれた咸臨丸である。1860（万延元）年、咸臨丸の太平洋横断は、鎖国日本の夜明けを告げる壮挙であった。幕末日本の歴史に触れて話題を広げるには不足のないクルーズである。

咸臨丸の太平洋横断所要日数は37日、その航海に中浜万次郎の果たした役割は大きかった。捕鯨船に乗り込み七つの海に挑んだ経験、その観測の正確さ、航海の巧妙さには、便乗したアメリカの観測船の船長も感嘆し大きな信頼を寄せたという。土佐の先覚者中浜万次郎は33歳であった。

海からの桂浜、東に上龍頭岬、西に龍宮鎮座の下龍頭岬、両岬に抱き込まれて砂浜が存在を主張する。背後の高い緑が城山、人は俗に浦戸山と呼ぶ。長宗我部氏の居城浦戸城跡である。ここでの戦いの記録は南北朝期の1336（延元元）年が最初であり、1560（永禄3）年には本山・長宗我部氏の会戦がある。長宗我部氏は文禄元年の朝鮮への出陣を期に浦戸城を改修し近世的城郭に仕上げた。その遺構はいまも多くの城ファン呼び、保存顕彰の声は絶えない。

上龍頭岬は燈台の岬、あるいは行燈の岬ともいわれる。その岬頂に悠然と立つのは坂本龍馬の像。人は「その雄姿、土佐の九十九灘を圧して土佐男子の意気を示し真に壮快」と讃える。海からの龍馬像は、周囲の松緑にとけこみ明確な輪郭を追うのは容易でない。

4月21日、新装オープンした龍馬記念館の建物のイメージは「蔵」という。本格的な収蔵庫は完備し、温湿度管理や遮光、塩害対策も完璧、近い将来の「公開承認施設」の認可を目指している。9月1日には入館者も10万人に達したという。洋々と開ける大海原への出港である。

魅力的な企画展の展開が人を呼ぶ。周辺にはまだ数多くの歴史の風景が存在する。これらも活かした斬新な発想によるユニークな企画の展開に期待したい。

ますますの発展を祈念してやまない。

平成28（2016）年7月から始まった「浦戸　歴史の風景」では、浦戸の歴史についてさまざまな話題を提供していただきました。連載10回を区切りに今回で終了いたします。

『桂浜・浦戸　碑めぐり』⑪

青年たちの熱い思いによって建てられた「坂本龍馬先生銅像」

桂浜の小高い丘の上に建つ坂本龍馬像。像身5.3メートル、台座を含めた総高は13メートルを超え、訪れた人はまずその大きさに驚く。右手を懐に入れた有名な立ち姿の写真を元につくられており、目線が太平洋の遥か彼方に向けられているのが、〝世界の海援隊〟を夢見た龍馬らしいところだ。

この銅像は、高知出身で当時早稲田大学の学生であった入交好保（いりまじりよしやす）さんが発起人となり、青年たちの募金活動によって建てられた。銅像建設趣意書には「先生の英姿を瞻仰（せんぎょう）することにより第二第三の坂本をこの土（と）に生ぜしめんとするにある。即ち吾人の期待はかかって次代にあり未来にある。」と記されている。

入交さんは龍馬の銅像を桂浜に建てることを最初から決めていたという。「アメリカの平和の女神に対照して、太平洋を遠望しながら土佐の名勝桂浜の巌頭に建てなくてはならん、その土地が誰のものであろうと龍馬のために譲って貰わねばならん」ということで、桂浜龍頭岬の高台に「坂本龍馬先生銅像建設地」と大書きした木柱を立ててしまい、後に土地所有者の了解を得ている。

募金活動は「龍馬の銅像は青年の手で」を合言葉に、高知県内の青年を中心に、一人あたりタバコ1箱分相当の20銭を募った。台座裏の銘板に「建設者　高知県青年」と刻まれているところからも、この龍馬像が青年たちの熱い思いによって建てられたことを感じ取ることができる。

昭和3（1928）年5月27日に行われた銅像除幕式には約1万人が集まったという。

その中には龍馬と共に海援隊で活躍した田中光顕の姿もあった。

毎年、春と秋に開催される「龍馬に大接近」では、龍馬像の横に高さ13メートルの特設展望台が設置され龍馬像と同じ目線で太平洋を眺めることができる。普段は見ることのできない龍馬像の横顔も必見です。

参考：『坂本龍馬先生銅像ものがたり』（入交好保編著）『土佐人の銅像を歩く』（岩崎義郎著）『龍馬ゆかりの人と土地』（高知県立坂本龍馬記念館発行）

尾﨑　由紀・宮﨑　圭子

「桂浜・浦戸　碑めぐり」は平成28（2016）年7月から始まりました。記念館周辺の石碑を紹介してきましたが、その大方を取り上げたことをもって今回で終了いたします。

飛騰の紙面にスマホをかざして動画を見よう！
視聴方法は簡単！
① 右のQRコードから無料アプリ「COCOAR2」をダウンロード
② アプリを起動し マークのついた写真にスマホをかざす
※端末の環境により、イメージが認識されるまでに時間がかかる場合や、正常に動作しない場合があります。
※本コンテンツは2018年9月30日まで閲覧可能です。

拝啓 龍馬殿

平成30年6月21日～9月20日

304通

太平洋を展望できるこの館にこられてすこぶる満足。きょうまた、私と同姓の「龍馬氏」に会えてとても幸せです。全国の「坂本姓」頑張れ！そして皆様に感謝。

（6月24日　東京　K・S　74歳　男性）

南国土佐・高知に転勤してきて2年が経とうとしています。土佐の人の温かさというより熱さに助けられ、あるいは刺激を受けながらなんとか過ごしてきました。高知のために何ができるか分かりませんが、いつもこの土地に貢献できることは何かを考えながら生きて参ります。龍馬殿、あなたには負けません。土佐で学んだことを胸に、日本全体を支える人になります。

（7月2日　T・N　29歳　男性）

中学生の時、『竜馬がゆく』を読んで以来、龍馬さんの行動力、構想力、夢を追う志に憧れてきました。小生はすでに今年で57才になり、少年は中年、いや壮年期を迎えるようになりました。さて、ようやく夢叶い、桂浜まで会いに来れました。これからの人生を考える時、もう一度龍馬さんとともに自分の人生の総仕上げ、そう、我が一生をもう一度洗たくいたしたく候の思いを強くいだきました。ありがとう坂本龍馬さん。生涯の師として私の心にこれからも共に生きてください。今が青春、ともに力強く悔いなく生きよう。自分の信念とともに！

（7月6日　57歳　男性）

当時、世界へ行くなどと考えもしなかった時代に、国のこと、世界へと思いをはせ、今の私には考えもつきません。ものにあふれ、世界とつながった現代でできないことなど何もないと龍馬殿の行動力をみるとそう感じずにはいられません。できないことは何もない。今、これから、あと先考えず進むのみ！そう決意した。

（7月8日　大阪　Y・N　30歳　男性）

龍馬さんに会いたかったです。今の日本にあなたがいてくれれば、日本は世界一の国になれたはず。今の政治家など足元にもおよばない日本のリーダーになっていたでしょう。そうすればもっと若者も希望を持てている事でしょう。今の日本はダメです。龍馬さんに会いたい。

（7月8日　45歳　女性）

私も龍馬になりたい。悩み苦しみ、自分の成す事を考えて行動した龍馬。そんな龍馬に私もなりたい。

（7月14日　鹿児島　51歳　男性）

初めまして。ここに来るまでは龍馬さんのことはよく知らなかったのですが、今日、龍馬さんについて良く知る事ができました。私は今中学2年で勉強が大嫌いです。歴史も嫌いでテストでも点数がとれません。けれど、今日ここに来て、歴史をおもしろいと思うことができました。もう少しで龍馬さんについても学校で学びます。そこが範囲のテストでは良い点がとれるようにがんばります。

（7月16日　神奈川　13歳　女性）

長年のファンにより、いつか絶対に来たいと思いながら中々実行出来なかった事が、妻が計画してくれたバースデー旅行で実行できました。本当に来れて良かった。ますます坂本龍馬のファンになりました。自分もあなたみたいにカッコイイ男になれるよう精一杯がんばっていこうと思います。坂本龍馬様、本当にありがとう。

（7月20日　東京　Y・O　40歳　男性）

「かっこいい！」あんな新しい考えをあの時代に持ってたなんて。自らどんどん動いて世の中を変えていったんですね。その時代の常識とされる考えなんてどこへやら。自分の考える道に進んだあなたは本当にかっこいい！私もあなたのように進んでいく。あなたと同じ土佐に生まれて生きられて良かった。ありがとう！

（7月22日　高知　S・S　46歳　女性）

初めて高知県に遊びに来ました。桂浜水族館に興味があったからです。桂浜に来ると龍馬さまが立っていそうでワクワクしました。今日も暑

ここは館長の部屋

髙松　清之

光陰矢の如しと言われるが。

時が過ぎるのは速いもので、リニューアル・オープンから半年が経とうとしている。

お陰様で、開館から2か月足らずで5万人目の来館者をお迎えし、その後も予想を上回る多くの方々に足を運んでいただいており、この10月号をお届けできる頃には、11万人を突破しているのではと、捕らぬ狸のなんとか・・・である。

オープン前後の様々な取材の申し込みや展示解説の依頼などに追われた頃の喧騒も一段落といったところだが、来館される方々、特に私自身の知り合いがいるグループの中には、案内役を学芸員でなく館長にと御指名いただくことも少なくない。専門家でない私のような者でも、リクエストいただけるならと、新館の常設展示から始まりジョン万次郎展示室、企画展示室を巡って、本館の幕末広場、そして幕末写真館へと乏しい知識を総動員しながら、一通り御案内させていただくが、果たして皆さんに新しい記念館の醍醐味を感じていただけたのかどうか。全く自信はないのだが。

こうした中で気付いたことだが、リニューアル前に比べて観覧の導線が長くなっていることもあり、とにかく一巡するのに時間が掛かる。展示の一つひとつを概観していくだけで1時間半は必要というのがアベレージではないだろうか。なかには半日を要してしまったといった方の声も度々耳にするところで、ツアーで来館される団体客の皆さんに、限られた時間の中で十分に楽しんで頂けているのかと心配してしまうこともある。

拝啓龍馬殿（上）とアンケート（下）

さて、開館後に館長の日課の一つに戻ってきたのが、来館者の方々からいただくアンケートや龍馬に向けたメッセージが綴られた「拝啓龍馬殿」に目を通すことである。これらは、これからの記念館の運営を充実させていくうえで、我々スタッフにとっては、大事な拠り所となる皆様からの生の声であるが、総じて、新館での「史料」展示が従前に比べてグレードアップし、見応えがあるとの評価や、展示を一新した本館についても、子ども達はもとより、大人の方々からも分かり易いし、いろいろ楽しめる空間になっていると好感をもって迎えていただいていることが窺われる。

ただ一方では、新館・本館の2館で一つの施設となったことに伴って、新館から入って本館から出ていただく、つまり入口と出口が別々になったことで迷ってしまったり、戸惑ったりといった声や、観覧の順路が複雑で分かりにくいとの御意見も少なくない。また、あってはならないことであり、猛省しなければならないが、展示のキャプションについての間違いを御指摘いただいたこともあった。いずれも、できるだけ速やかに修正したり、案内サインを増やしたりといった対応を進めてきているが、記念館をさらに充実させ、成長を促そうとの皆様からの御意見や御指摘に対しては、この紙面を借りて改めて感謝を申し上げたい。龍馬ではないが、柔軟な姿勢と行動力を備えて、記念館の明日に向かって走りながら考え、改善を積み重ねて行かなければならないと感じている。

いですね。龍馬様は今ごろ天国にて冷房をがんがんにきかせながら寝ころんでいるところでしょうか。うらやましいです。さて話は変わりますが、今日はじめて記念館に来てみて、龍馬様の存在がはじめて近くに感じられました。今日撮ったあの2人の自撮り写真、宝物です。龍馬様直筆の名刺、家族へのお土産としました。すてきな思い出をありがとう。感謝を込めて。愛してる桂浜。また来ます桂浜。

（7月23日　愛知　Y・S　23歳　女性）

ふと、龍馬さんが何を想い、何を為した人なのか知りたいと思い、高知まで来てしまいました。土佐の海は青く、土佐の人は温かく、良い国だなと滞在中何度も思いましたよ。私もあなたのように志をもって生きていきたいなあ（最近ようやっと自分が何を目指してきたかわかってきたのです）。またいつか高知には来ようと思っております。それまでどうぞ高知の空から見ていてください。

（7月24日　24歳　女性）

小学六年生の頃、『竜馬がゆく』にはまり、母と共に京都にお墓参りをしたり、寺田屋を訪問しました。子どもながらに、その人としての素晴らしさに感動し、子どもが産まれたら絶対名前を龍馬とつけようと思っていました。結局名前はつけませんでしたが、小一の頃から歴史にはまった息子は、龍馬ファンになり、同じように京都めぐりをし、今回初めて一緒に高知を訪れることができ感動しました。これからも日本を見守ってくださいね。

（7月26日　東京　K・S　40歳　女性）

3年ぶりの高知桂浜です。龍馬さんをただただ尊敬し、現在は県議会議員として政治の現場にいます。これからも力を与えてください。龍馬が人生の手本です。ありがとうございます。

（7月30日　佐賀　K・A　42歳　男性）

高知に住んでいるとなかなかこちらに来ることはないです。久しぶりに龍馬さんに接することができました。私が通っていた第四小学校の古い講堂には龍馬さんの肖像画があり、私は校歌そっちのけでその絵をながめていたことでした。ちなみに確か校歌にも「坂本龍馬の生まれたところ」という詩があったと思いますよ。小学校の写生大会の賞品も龍馬さん、あなたの小さなレプリカ…、今やあれはどこにいったことでしょう。還暦をすぎ、龍馬さんより長生きした分、今の日本を見ることができています。八畳岩にも登りました。これからの高知、日本をここ桂浜から見守り続けてください！

（8月2日　高知　H・U　60歳　女性）

龍馬さんの手紙を読んでおそらくおしゃべりな人だったんだなと思いました。今、僕のとなりにもおしゃべりな人がいるので、僕は中岡慎太郎に感情が入っています。おしゃべりはたくさんのアイディアが湧くし、ポジティブにもなっていくので、そういう人だったんだろうなと思います。旅行でこっち（高知）に来ているのですが、あ、ギャグじゃないんですけど、桂浜の海が壮大で、でっかい男になりたいと思ったので、あっち（愛知）で頑張ります。

（8月8日　愛知　H・O　26歳　男性）

熱い熱い想いでやってきました。あまりにゆっくり観て投函するのに時間がたりませんでした。大変、更に龍馬のファンになりました。

（8月10日　熊本　H・I　64歳　女性）

初めまして。今回の旅行で初めて高知県に足を踏み入れました。高知中の人々が龍馬さんのことが大好きで、改めてあなたの偉大さを感じました。時は平成最後の年。もしあなたが私と同世代としてこの時代を生きていたら、何を考え、どう行動していくのでしょうか。生まれた時から世の中は不景気。勝手に始まった〝ゆとり教育〟のおかげで〝失敗の世代〟とレッテルを貼られている。女性活用〟を説きながら終わらないパワハラ、セクハラ、マタハラの数々…。列挙したら止まりません。ゆとり教育の中で横並びを植え付けられてきた私たちの中に、あなたのような抜きんでたスターがいればまた何か違うのでしょうか。一緒の時代を生きてみて欲しかった。

（8月10日　千葉　S・T　24歳　女性）

今日は家族で高知に来ました。生まれたころから毎年来ています。私はもともと歴史の人物が好きでしたが、特にりょう馬の「日本を今一度せんたく申候」という言ばがとても好きです。りょう馬さんが今の時代に生きていれば、私は大きなしょうげきをうけたと思います。りょうまさんの自由な性格がすきです。またらいねんきます。

（8月11日　13歳　女性）

ぼくは今、坂本龍馬記念館に来ています。この記念館は今まで行った多数の記念館の中で一番楽しかったです。龍馬殿の銅像、すごくかっこよかったです。ぼくは写真を10枚近くとってしまいました（笑）。記念館では龍馬殿の生がいや龍馬殿が深く関係した「薩長同盟」や「大政奉還」について興味深く知ることができました。これからぼくは中学受験をします。この中学受験を乗り越えて、龍馬殿のようなりっぱな人になりたいです。龍馬殿はとても心強く生きてすごいなと思いました。ぼくはこれからも心強く、そしてくいのないように生きていきたいです。龍馬殿はサイコーですね。

（8月13日　東京　T・T　11歳　男子）

私は大学進学を控えた18才の学生であります。二年間のインド留学を終え、世界中の若者達との差を肌で感じ、大きな劣等感と、将来に羽ばたく成長への決意を強く感じている今、貴殿の人生を語る本記念館を訪れさせていただきました。貴殿がお亡くなりになってから150年経った今、貴殿に敬意を表し、日本の学生はその活躍と功績を学校にて学びます。私も例外でなく、貴殿の事を幾年か前に学びましたが、恥ずかしながら本館を訪れるまでその詳細を存じ上げませんでした。本日、本館で貴殿の大いなる熱意と先見の明、そして大きな目標への失敗を恐れない行動力に大いに感銘を受け、同時に、時代は違えど、大きな世界を恐れずに見る貴殿の姿に私の理想像を見ました。本日、坂本殿より時代を超えて頂いたこの熱き想いを忘れずに、私も未来へ高く邁進して参ります。

（8月13日　東京　J・T　18歳　男性）

久しぶりですね！以前は3月に龍馬さんに会いに来させてもらいました。この5カ月間龍馬さんに会うことを糧として高校生活を頑張っていました。『竜馬がゆく』を読んで龍馬さんのことが大好きになり、今では英語のスピーチも龍馬さんについて、筆箱には龍馬さんの写真が貼られた缶バッジをつけて毎日それを見て幸せを噛みしめています。クラスの友達からも「龍馬」と呼ばれていて本当に幸せです！片時も龍馬さんのことを忘れません。また来ますね！

（8月18日　奈良　M・Y　16歳　女性）

龍馬殿。私は高知と龍馬が大好きで、子どもの名前を龍海と名付けました。龍馬さんのような男らしい子になってほしいです。

（8月29日　兵庫　T・O　46歳　女性）

夏休み子ども教室

今回は、新しいホールを会場にする初めての「夏休み子ども教室」、2日間続けて開催しました。

河村　章代

1日目「紋切うちわをつくろう！」

1日目は「紋切りうちわ」づくり、龍馬記念館のお馴染みの工作教室です。

「紋切り」は江戸時代から親しまれている紙切り遊びです。折り込んだ紙に型紙をあて、そのとおりに切り抜き、そっと開くと様々な形があらわれます。「こども教室」では、そうして作った「紋切」を白い団扇に自由に貼り付けて、オリジナル団扇を作りました。坂本龍馬にちなんで坂本家の家紋「組み合わせ角に桔梗」は、２つの紋切を組み合わせてつくるちょっと難度の高いものですが、みんな上手につくって「龍馬うちわ」を完成させました。

2日目「お侍さんに変身！刀をつくろう！」

龍馬が大の刀好きだったことにちなみ、2日目は、なかひらじゅんこさん（イラストレーター、美術作家）の指導で刀をつくりました。

三浦学芸員から龍馬と刀の関わりのお話を聞いた後、常設展示室の「陸奥守吉行」などの刀を見学。その後、いよいよ「刀づくり」です。何重にも巻いたアルミホイルを木槌でガンガン打ち延して、刀をつくりました。この方法、金属の塊を打ち延して造る、実際の刀鍛冶を参考にしています。刀身ができたら、段ボールや折り紙、毛糸で鍔や鞘、柄をこしらえ、みんなの「自分だけの刀」が完成しました！

海の見える・ぎゃらりい

■「龍馬・りょうま・Ryoma」展

10月2日（火）～12月22日（土）に開催する「龍馬・りょうま・Ryoma」展は、グランドオープン第2弾“海の見える・ぎゃらりい”の企画展覧会です。

今回の展覧会は、リニューアルした海の見える・ぎゃらりいにおいて、作家の方とも新たにぎゃらりいをスタートしたいという思いも含め、「龍馬」に因んだ新作を20名の作家に依頼しました。

「それぞれが思い描く龍馬」は、洋画・版画・日本画・書・写真・イラスト・切り絵・歌の各ジャンルの作家が、自由に大胆にそして繊細に表現しています。

濱崎秀嗣「リスボンを行く」

例えば、濱崎秀嗣さんの洋画「リスボンを行く」は、存在する龍馬の魂の廻りを、時代を越えて人々が移ろいゆくかのような印象を受けます。そして、坂の多い路面電車が走る長崎と同じく、坂も多く路面電車も走るリスボンに、龍馬がいてもおかしくないかもしれない。そんな気持ちを掻き立ててくれる作品です。濱崎さんのコメントには「上略…龍馬は生きのび今でも世界を駆け巡っていると思いたい…。」と書かれています。

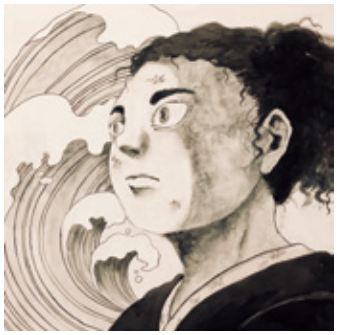
筒井孝枝「志 ～龍馬さんの夢をのせて～」

また、筒井孝枝さんの版画・コラージュ「志 ～龍馬さんの夢をのせて～」は、大きな白船が蒼い波に乗っかり、赤ちゃんを抱いた幾つもの幸せそうな家族写真がコラージュされています。みんなの未来と夢は龍馬とともにといった感じでしょうか？思わず笑顔になってしまいます。

田中白耀「舟 － 不繋之舟（ふけいのふね）－」

一方、田中白耀さんの書「舟 －不繋之舟（ふけいのふね）－」は、繋がれてなく、ただ波に漂う舟と言う意味から、自由奔放に動き回り見分を広める龍馬にピッタリの題材だと伺いました。作品の文字は、本当に波に漂う舟やブイに見える不思議さがあります。

そして、石見陽奈さんの日本画「はじまる」は、大きく眼を見開いた少年龍馬が、真っすぐ、力強く未来を見据えている姿が描かれています。その瞳には思わず吸い込まれてゆきそうです。



石見陽奈「はじまる」

この他、洋画：岩本和子さん・国吉晶子さん・吉松由宇子さん。日本画：江本象岳さん。書：髙松紅真さん・竹内暮雪さん・竹内昌子さん・藤田紅子さん・山沖春蘭さん・酒井春蘭さん。写真：桐野伴秋さん・島崎順也さん。イラスト：楠本剛さん・永野尋美さん。切り絵：サトウユキエさん。そして、歌：増井はつこさん（書：岡崎桜雲さん）の作品が一堂に並びます。

「歴史の中の龍馬」を御覧いただいた後は、本館“海の見える・ぎゃらりい”の「創造の龍馬」の世界に足をお運びください。

中村　昌代

入　館　状　況

2018年9月20日現在
（1991年11月15日 開館以来 26年310日）

◆総入館者数　4,047,318人

◆グランドオープンまで　3,936,760人
（2017年4月1日～2018年4月20日休館）

■グランドオープン（2018年4月21日）以来　110,558人

編集後記

本号より編集担当が交代しました。このタイミングで2つの連載が最終回となり、次号は新コーナーを予定しています。堅い誌面になってしまわないようにと自戒するところですが、果たして…。記念館全体の動きとしても、開館（平成3年）以来の来館者400万人という区切りを迎えるなど、館の「これまで」と「これから」を意識する機会が少なくありません。不易流行。開館以来変わらない精神を軸に、時々に変化を重ねていかねばなりません。（た）

館だより“飛　騰”第107号（年4回発行）表紙題字：書家 沢田 明子氏
発行日　2018（平成30）年10月1日
発　行　公益財団法人高知県文化財団
高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
http://www.ryoma-kinenkan.jp
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間　9:00～17:00　年中無休
入 館 料　一般 490円（企画展開催時 700円）
高校生以下無料
高知県・高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者（1名）は無料

「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は120円切手をご希望回数（4回分まで）お送りください。
〒781-0262　高知市浦戸城山830　高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読 係 まで

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

ごあいさつ

現代龍馬学会会長
宮　英司

昨年の現代龍馬学会総会において第3代の会長に就任いたしました宮英司（みや・えいじ）と申します。本文にもありますように、中学校の教員をしていました。今は幼稚園長として勤務する傍ら、大学の非常勤講師などをしています。会報に執筆する機会をいただきましたので、職業柄考えていたことなどを少し綴ってみたいと思います。

以下は、平成24年1月に当時の文部科学大臣あてに郵送した「歴史学習における坂本龍馬の位置づけについて」という手紙です。

その後、私の動きを知った会員の方からのご意見で、ほぼ同様の文面を当時の会長さんと館長さんの連名で改めて文科大臣に手紙を出すということもしたように思います。ただ、昨年発表された新しい学習指導要領では、格別の変化もなく、平成元年から続く42名の歴史上の人物もそのまま踏襲されたようです。

いろいろな考え方があるだろうとは思いますが、少しは当方の言い分にも耳を傾けてくださる方が文部科学省内にも出現することを願って、諦めずに意見を届けていくことが大切かな…と改めて考えています。

ところで現代龍馬学会に集う皆様方には、「様々な場面を通して（『龍馬のひろば』も含めて）会員相互の交流を深めていきましょう」と呼びかけをさせていただきまして、ご挨拶といたします。

＊

あけましておめでとうございます。

ご就任直後のご多忙の折に、突然のお便りを開封していただきましてありがとうございます。私は長年、高知県の中学校におきまして教壇に立ち、社会科の指導をしてきた者です。平成22年3月31日を持ちまして、現役を退き、今は国立大学法人高知大学教育学部におきまして非常勤講師を務めています。

中学校長の折には、高知県社会科教育研究会長を7年間、全国中学校社会科教育研究会副会長を6年間務めました。また、最後の1年は、全日本中学校長会副会長を務めまして、全国の教育研究活動の推進に尽力してまいりました。

今回、文部科学大臣様にお願いしたいのは下記の42名の歴史上の人物についてお目通しいただきたいということです。

卑弥呼、聖徳太子、小野妹子、中大兄皇子、中臣鎌足、聖武天皇、行基、鑑真、藤原道長、紫式部、清少納言、平清盛、源頼朝、源義経、北条時宗、足利義満、足利義政、雪舟、ザビエル、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、徳川家光、近松門左衛門、歌川（安藤）広重、本居宣長、杉田玄白、伊能忠敬、ペリー、勝海舟、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、明治天皇、福沢諭吉、大隈重信、板垣退助、伊藤博文、陸奥宗光、東郷平八郎、小村寿太郎、野口英世

これは、小学校学習指導要領の社会科6学年の学習内容の取扱いで示されています。そして、「例えば、次に掲げる人物を取り上げ、人物の働きを通して学習できるように指導すること。」とされています。この42名の表記は長年変わっていないように思います。また、当然のことながら、中学校の歴史学習にも大きな影響を与えているものと思われます。

このことに異を唱えるものではありませんが、ここに坂本龍馬の名前が入っていなくていいのでしょうか。申すまでもなく、坂本龍馬の業績としては薩長同盟の締結への尽力と大政奉還の実現に向けての側面的支援等々の日本史上の分岐点ともいうべき大きな働きが挙げられます。

この点については、高知市教育委員会発行の「小中学生のための坂本龍馬物語」において次のように述べられています。

「薩長同盟」がなければ、徳川幕府を倒すことができなかったわけですから、明治維新のもとは、龍馬がそれをつくったと言えると思います。しかも、龍馬は、武力を使わないで、後藤象二郎を通じて、将軍を説得し、平和のうちに政治の実権を明治維新政府にひきわたさせたのです。この「大政奉還」のようなことは、世界の歴史にも例がありません。

まさに、この高知市教育委員会の副読本の表現の通りだと思います。つまり、坂本龍馬の業績は、上記の42名に決して劣っていないばかりでなく、むしろ傑出しているとも考えます。日本の歴史学習において、坂本龍馬がもっともっと大きくとりあげられて然るべきだと考えます。そのためにも、小学校学習指導要領の社会科6学年の学習内容の取扱いにつきまして、将来的な見直しをお願いいたしたく、不躾なお手紙を書かせていただきました。

文部科学大臣様におかれましては、激務の毎日のことと推察いたしますが、どうか健康第一でお過ごしください。そして、次の学習指導要領の改訂の際に坂本龍馬が位置づけられますようよろしくお願い申しあげまして、この手紙を終りにさせていただきます。

（追伸）「小中学生のための坂本龍馬物語」を贈呈させていただきます。

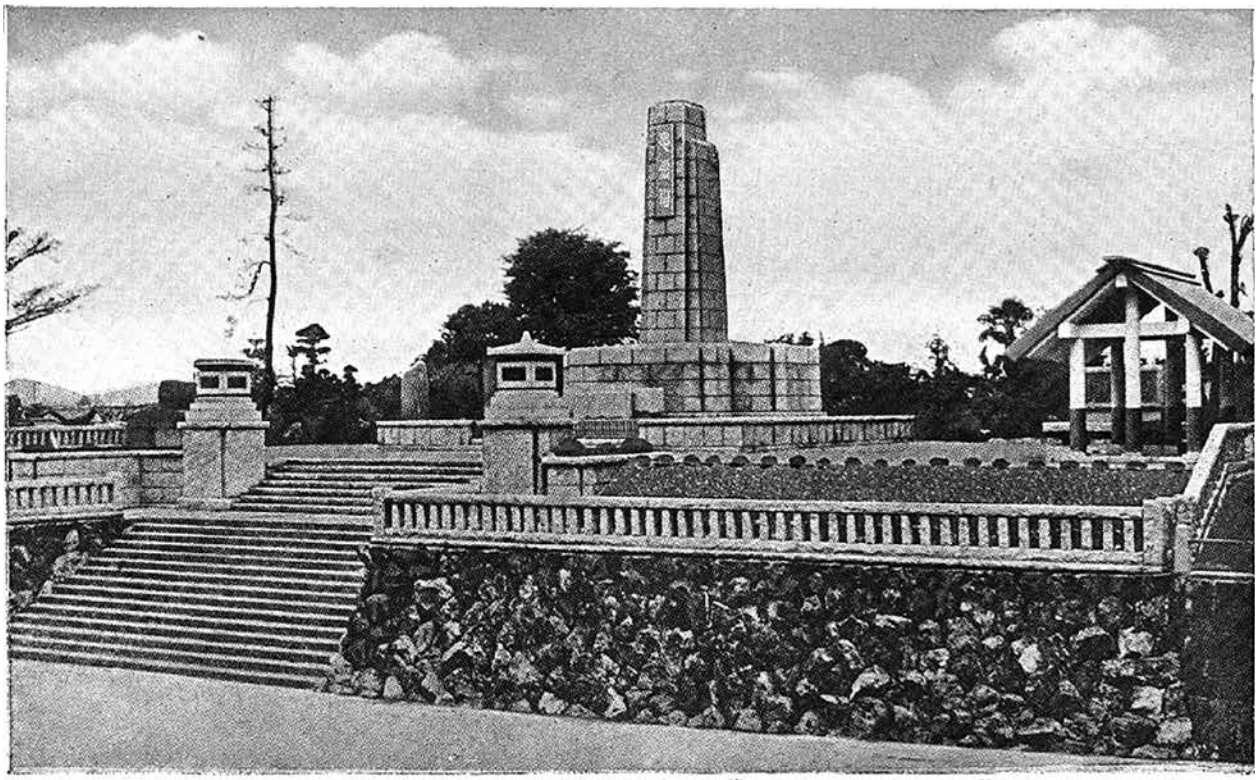
私のテーマ

柳原にあった「龍馬彰勲碑」と「忠魂護皇基」

今井　章博

桂浜の龍馬の銅像から少し西に下ったところに「龍馬彰勲碑」と細川潤次郎の歌が刻まれた「忠魂護皇基」の歌碑があります。これらは、もとは柳原に設置されていたことが、坂本龍馬記念館制作パネル「故阪本龍馬先生彰勲碑と忠魂護皇基の歌碑」に坂本源三郎氏の娘宍戸茂さんの後日談として記されています。

では、柳原のどこに設置され、いつ移設されたのでしょうか。月刊誌・『高知縣人』（昭和54年1月号）に有光次郎氏が書かれた「恩師をめぐる一挿話」によると「柳原公園の西端忠霊墓地の隣に建てられた」とあります。移設時期について「詮議の末坂本龍馬の銅像建設を機会に桂浜へ移されている」とあることから龍馬の銅像が建設された昭和3年5月以降に移されたものと思われます。ただ、移設の時期については、判然としません。田中貢太郎の随筆『杖頭銭』の「南国行」では「龍頭岬の丘にならうとした處の路ぶちに茶店がめって海援亭と云ってゐた。其處に知りあひの老人がゐて、銅像のまはりを掃除するとともに、茶店の上になった桂月先生の記念碑の掃除もしてくれるので、私は帰って桂月先生の紀念碑を參詣するたびに、海援亭で酒と肴を求め、それを莚といっしょに記念碑の傍まで運んでもらって、まづ記念碑に一ぱいの酒を供へ、それから心ゆくばかり桂月先生をしのぶことにしてゐた。」（昭和9年8月）とあり、彰勲碑には触れられていません。



高知市忠霊塔　高サ十一米三　財團法人大日本忠霊顕彰會

上の絵葉書は、戦前の柳原の忠霊塔の写真です。ここにはもう彰勲碑等は見当たりません。忠霊塔の左に石碑が見えますが、これは一部破損しているものの現存している「義勇奉公碑」です。書家の西森真太郎（鉄研）の撰文があり、日付は、明治40年9月とありますので、内容からも日露戦争時に高知から出兵した方々の戦没

慰霊のために建碑されたことが分ります。龍馬彰勲碑等はこの左右どちらかに設置されていたものと思われます。絵葉書の大日本忠霊顕彰会の発足は昭和14（1939）年7月で、撮影されたのはその後ということになりますが、撮影時にはすでに移設ずみであったようです。

肝心の彰勲碑ですが、その来歴が、大正5年11月5日付『土陽新聞』に載っています。

「香美郡東川村末延元吉氏は当年七十九歳の高齢なるが石工を業とし居れるも維新の志士坂本龍馬先生を崇拝すること甚だしく、未だ同先生の碑が県地の何れにも一ヶ所もこれなきを慨し、本年は来る十五日京都霊山にて五十年祭典の挙行せらるるを機とし、殊勝にも建碑を計画し、（略）碑へ板垣、土方両伯の碑銘を請ひたるものを建造し、更に（略）正二位男爵細川潤次郎氏が坂本龍馬が昭憲皇后御夢に入りしを詠ぜし『とこしへに国守るらん亡き魂もきさいの宮のゆめにちかひて』と刻せるを建造し」たとあります。

また、碑の完成にあたっては盛大なセレモニーが催されました。

「（碑は）十二日午後二時（略）高知公園より柳原まで曳かしめ十三、十四両日建立に掛り十五日盛大なる余興を催す由」「12日の日曜に海南もしくは商業校の生徒これを曳き柳原に建つる筈なるにより、藤崎市長は末延氏の快挙を奇特とし之を壮ならしめんと当市の侠客鬼頭良之助氏に諮りしにより、鬼頭氏の斡旋にて愈々15日午前10時を期し、大貞観遊両楼芸妓は屋台に投げ餅を曳くこととなり、尚ほ当日の奉納演武として柔道、鋲剣あり、当日柳原付近は賑ふとなるべし」（大正5年11月11日付『土陽新聞』）と碑にも名前が刻まれている鬼頭良之助氏の斡旋により建碑イベントが催されたという記載があります。

この碑に刻字した末延元吉氏ですが、「坂本龍馬先生の為に記念碑を建立する可く東川村より七八十日の間日々柳原に通ひ遂に独力を以て之を完成（略）去月二十八日上京して床次内務大臣を訪ひ板垣伯、細川男等を訪ふて時勢を談じ」たようです。（大正8年6月12日付『土陽新聞』）また、末延氏は、神社等に種々の建造物を寄進したことなどにより、大正6年に香美郡長から、表彰を受けています。

以上新聞記事から、彰勲碑が柳原に建碑されたのが、大正5年11月15日。その日には、京都で「坂本中岡両先生50年祭」が執り行われています。それに合わせて高知でも関連イベントを開催しようと彰勲碑の建設が企画され、15日の式典に合わせて建碑されたもののようです。京都の式典には田中光顕とともに藤崎高知市長も臨席しています。

彰勲碑には、板垣の撰文があり、前述の宍戸茂さんの後日談によれば、板垣に直接依頼したのは、父君の源三郎氏のようで「源三郎から、板垣退助氏のところへ撰文を書いていただいたお礼に行くように言われ、ある日手土産を持って板垣宅を訪れました。」と回顧されています。板垣の撰文は興味深く、「当時予ハ君ノ刎頸（ふんけい）ノ同士タル中岡慎太郎ト交リ俱ニ討幕ノ議ヲ決シ西郷隆盛君ヲ訪フテ死ヲ誓フテ挙兵ヲ約セリ」と龍馬とは直接接点はなかったようです。

龍馬の殺害現場にも駆けつけた田中光顕ですが、彰勲碑の建碑があった大正5年時、撰文を書いた板垣は80歳、「東奔西走…」の漢詩を書いた土方久元は84歳、和歌の細川潤次郎は、83歳と長老組が健在で、74歳の田中はこれら元勲の中では若手で、どうも出る幕がなかったようです。

現在桂浜にある坂本龍馬彰勲碑

細川潤次郎の龍馬をうたった歌碑には「とこしへに國守るらんなき魂も皇后（きさい）の宮のゆめに誓ひて」が刻されています。「皇后（きさい）の宮のゆめ」とは、日露開戦前の明治37年2月に龍馬が昭憲皇太后の夢枕に立ち「ロシアとの戦争が始まれば、日本海軍を全面的に保護するといい、消え去った」というニュースが明治37年4月13日の『時事新報』に報じられたことに起因します。その後、日本海戦に勝利したことで、龍馬の名声はさらに上がりました。三条実美が詠んだ「武士のそのたましひやたまちはふ神となりても国を守るらむ」を受けて詠まれたものと思われます。

龍馬の銅像とともに制作された阪妻の「阪本龍馬」のラストシーンで刺客に襲われ致命傷を負い、目の見えなくなった龍馬が中岡慎太郎に向い、「皇居は?」と叫び、中岡が皇居の方を向かせるシーンがありますが、この一連の流れを考えると、龍馬の像が皇居の方を向いていることも頷けます。

こぼれ話 ― 犬歩棒当記（三十五）―

日本人のお名前 ― 幕末編 ―

宮川　禎一

某公共放送の日本人の名前を題材にしたバラエティ番組を毎回楽しく視ている。そんな変わった苗字があるのか!?といつも驚く。そのルーツを探るところも興味深い。

幕末史にも何人か不思議な苗字をもつひとが出てくるが、毛受鹿之助という名前の越前藩士がそのひとりだ。最初は「けうけ?」などと読んで失礼したが、「めんじゅ（めんじょ）」と云うとは知らなかった。この毛受鹿之助は中根雪江や三岡八郎とともに慶応三年十二月に京都で新政府の参与となった人物だ。

しかし歴史を遡れば「毛受」という苗字の有名人がすでに居た。戦国時代、柴田勝家の家臣で、天正十一年の賤ヶ岳の合戦で敗色濃厚となった際に、主君勝家を北ノ庄城へ逃すために、身代わりとして奮戦して死んだ毛受勝助（弟）と毛受茂左衛門（兄）兄弟である。主君に忠義を尽くした家来の鑑として賞賛されてきた。毛受兄弟が討死した古戦場は滋賀県長浜市木之本町の山麓にあたる。明治九年には滋賀県令の籠手田安定（この人も珍姓だ）が彼らの墓碑を建立した。さらに昭和になって愛知県在住の毛受一族もそこに石碑を建てている。幕末の武家ならば越前松平家に「毛受」という家臣がいることに感慨を持ったはずである。

龍馬の師、勝海舟先生も珍しい苗字だ。親父の小吉が養子に入って継いだ旗本の家である。慶応二年に大坂へやってきた勝海舟が多忙な本務の合間に祖先の地である「江州勝村」に使いを遣って云々、というような記述が『海舟日記』にあったはずだ。勝の御先祖は近江国坂田郡に発し、三河に移ったのち、天正年間に徳川家康に仕えた。江戸時代にはほぼ無名で小禄の旗本に過ぎなかったが、幕末に勝海舟が出て有名になったのだ。その勝先生が自分の家のルーツを気にかけて近江まで使いを出して訪ねさせたところが面白い。

勝海舟の祖先の地「江州勝村」は現在の滋賀県長浜市勝町にあたる。長浜城からも遠くない。もとは農村だったが、今は市街地となり、面影はない。写真を撮ったので、ちょうとだけ勝先生の気分を味わっていただきたい。

「ここは勝町です」の看板

コラム・龍馬のこと

「愛媛県大洲市と坂本龍馬」

坂本　世津夫

愛媛県大洲市長浜町は、文久二年の春、坂本龍馬が土佐を脱藩した時に宿泊した港町である。四年前から愛媛大学の仕事（南予の地域連携コーディネーター）をしている。仕事上では龍馬のことはあまり意識たことはないが、ただ毎週のように龍馬が脱藩した時と同じルートで、実家のある高知県南国市領石から愛媛県西予市宇和町を往復している。片道百五十キロメートルである（通称、仏像構造線ルートと銘々している）。龍馬の時代と若干違うのは、現在は国道一九七号線（通称「行くな酷道」）があり、片道二時間半程で移動できる。途中の津野町では、有名な通称「与作国道」と交叉している。龍馬が脱藩した時は、三月二十四日に高知を出て二十七日に長浜に到着しているから四日間かかったのであるが、今はわずかに二時間半である（超快適）。実家のある領石は、坂本龍馬の先祖が住んでいた才谷の入口付近に位置する。我が先祖にも文久二年、文久三年に亡くなった者がいるが、先祖まつりなどで龍馬とも会ったのではないかと妄想している。大学の仕事は、南予（自治体や企業など）の課題を大学と連携させて解決する仕組みを構築することであるが、昨年から大洲市肱川町の取り組み（観光開発と特産品開発）に係わっている（肱川プロジェクト）。そして、今年の夏からは大洲市長浜でも観光開発、特産品開発を行っている。観光のテーマは、やはり「坂本龍馬」である。長浜には、龍馬が滞在した冨屋金兵衛邸がある。また、肱川町の「肱川風の博物館・歌麿館」には龍のコレクションがある。肱川流域は、龍との縁が非常に深い地域である。是非、多くの皆様にお越し頂きたい。

冨屋金兵衛邸　https://www.tomiyakinbe.com/

第２回
「龍馬のひろば」の原稿募集について

主　題　**「龍馬に関する図書で、あなたの愛読書は何でしょうか？」**

今回は、みなさんの龍馬に関する愛読書の中で、「一押し」の作品についての情報を交流し合おう…ということになりました。申し訳ないですが、司馬遼太郎先生の「龍馬がゆく」については全員が書くことになりかねませんので、敢えて今回は除外させていただきます。

たくさんの図書の情報交換を通じて、会員のみなさんにとって初めての図書との出会いがあることを願っています。そして、みなさんが記述された「好きな理由」を読むことで、龍馬の新しい魅力を発見することにつながるのではないかと期待しています。

(i)図書名
(ii)発行所
(iii)好きな理由

(※)今回は司馬遼太郎作品を除外しての募集です。
(※)締め切り…平成30年11月15日(木)
(※)文字数…200字

参加ご希望の方は現代龍馬学会事務局までお申込みください。

【お申込み・お問合せ】
高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会事務局
電　話　088-841-0001　　ＦＡＸ　088-841-0015
ＭＡＩＬ　gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒781-0262 高知市浦戸城山 830
TEL (088) 841-0001　FAX (088) 841-0015
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp